

鹽原温泉

〔鹽原考〕鹽原の湯泉たるや、人皇五十二代平城天皇の御宇、大同元年臘月の比、獵師これを見出すといへども、千巖天に峙ち、万谷雲に埋み、荆棘を分ち難くして、空しく打過しに、其後小山氏何某と云し人、初て此道をひらき、民屋を立られしと也、按ずるに、古町湯泉大明神の鰐口に、謹奉寄附鰐口、下野州鹽谷郡下鹽原醫王山大權現御寶前、于時天文十二癸卯天三月日、鹽原城主小山越前守とあり、此人當地に住し、屋形の跡、醫王院の北の方にあり、城跡といひさも有べし、山に添小社貳ヶ所有りて、一社は宇都宮明神、一社は春日明神なりと、是屋形の鎮守成べし、引續古家數といふ有家士の住居といへり、何れも境地甚せまし、又旗下戸の上城跡有りて、前に帯川を帶後に穀堀貳重あり、昔は旗下戸を畑下戸と書しを、小山氏爰に出城を構へてより、旗下戸と出改めしよしなれば、此人の祖此湯泉を開らきしなるべし、

日光温泉

〔日光山志〕^四湯湖 是は湯元にあり、廣さ凡そ拾四五町に二十町許、

中禪寺温泉 八湯、中禪寺別所より西北に當り、赤沼原を逕、湯元迄三里、日光神橋より六里なり、春も風雪寒威はげしく、三月末迄も餘寒あるゆゑ、四月八日を初として登山し、各湯室を開き初むれども、白根嶽はまだ殘雪多く、五月末より六月に至らざれば浴するものも少し、九月には前山に雪降ゆゑ、九月八日を終として湯室をとじて麓へ下る、日光町方のもの持とす、湯室を開き、日々日光町より米穀園蔬を初め、其餘の諸品を脊負ひ送り、

河原湯 甚熱なり、湖水湛る時は熱し、乾く時はぬるし、

藥師湯 第一眼病によし 姥湯 苦味

瀧湯 甚冷なり 中湯 熱なり 笹湯 寒暑の濕をはらふ 御所湯 第一金瘡に妙なり

荒湯 熱湯なり 自在湯 平清なり、洪水の時、遣ひ水不自由なる時、此湯にて飯を炊きても匂ひなし、

湯平 温泉の浴室九軒あり、毎年始と終とすることは前に記せり、此温泉を開闢せし年代、之ら